

消化管その他

(533-538)

柏木ら(阪大)は、6例の蛋白漏出性胃腸症に Tc-99m HSA あるいは HSA-D を静注し経時的に腹部シンチグラフィを行い、3例で3時間後に回腸に集積を認め、残り3例では24時間後に大腸が描出され、対照としての3例の慢性肝炎では HSA-D を投与するも24時間後に腸管は描出されなかつたと報告し、free の Tc が胃より肛側へ流れ、false positive の可能性がないかどうか質問があり、HSA-D の標識率は高くその可能性のないことが示された。蝶ら(山形大)は、甲状腺の描出のないことで HSA-D の有用性を示し2例の蛋白漏出性胃腸症の綺麗なシンチグラム陽性像を供覧した。瓜田ら(東邦大)は、In-111 トランスフェリンを各種蛋白漏出性胃腸症7例と対照として血液疾患7例に投与し、静注早期より漏出部位の同定が可能であり、便中に排泄された放射能測定で対照に比し高値であったと報告し有用性を述べた。座長より Tc-99m HSA-D と In-111 トランスフェリンとで漏出部位の発現時間に演者間で差があることの質問があり、HSA-D も早期より描出されていたと返答があった。また潰瘍性大腸炎の加療前後の漏出の改善もシンチグラム上とえられたと瓜田より返答があった。平野ら(東邦大)は、In-111 トランスフェリンを大腸癌22例24病変に投与し、17病変をホットにとらえ、切除標本全例陽性所見を得た矛盾を膀胱等による隠蔽とし撮像の工夫の要ありと述べた。537席は市販されている痔疾の坐剤を In-111 と Tc-99m で薬物および基剤を標識し、新しく開発された付着性成分の入った坐剤が対照坐剤に比し、局所貯留の高いことを投与部位における残存放射能の差異で明らかにしたという薬物動態の発表であった。538席は遠藤ら(京大)が抗CEA抗体を用いるモノクローナル抗体の消化器癌の検出に認識するCEA抗原の腫瘍特異性を簡便に検討する方法を開発し、6種類の抗CEA抗体を検討し評価するという高度な内容で難解であった。

(野口雅裕)

(539-543)

唾液腺・食道のセッションでは、頭頸部放射線治療患者に対して唾液腺シンチグラフィを行い唾液腺機能障害の評価をした2演題と、食道再建および糖尿病患者に対して食道シンチグラフィを施行し、嚥下機能や消化管通過障害を評価した3演題の発表があった。

竹田ら(岡山大・放)は唾液腺シンチグラフィで得られた dynamic data を factor analysis で解析するという新しい方法を用い唾液腺機能を評価した。この方法により両側耳下腺および頸下腺を自動的に描出し、total の唾液腺機能を量量化した。今後、唾液腺機能曲線の解析などが期待される。間宮ら(埼玉医大総合医療センター・放)は従来の ROI を用いる方法で耳下腺・頸下腺の time activity curve を求め peak count, background count 等から摂取率、分泌率、分泌速度を算出し、摂取能に比し分泌能の障害が強いことを発表した。さらに症例をふやしての線量の違いによる唾液腺機能評価などが望まれる。大杉ら(大阪市大・二外)は $^{99m}\text{TcO}_4$ を用い、食道再建術式別に嚥下機能の評価を行い、通過時間、残存量から後縦隔再建術が生理的再建術であるという結論を得た。術後機能評価として比較的簡便で興味ある方法と思われる。Karayalcin ら(金沢大・核)は糖尿病患者に対して $^{99m}\text{Tc-DTPA}$ を用いて食道シンチグラフィを行い、食道通過時間の延長を認めた。また、比嘉ら(東邦大・二内)も糖尿病患者に ^{111}In を投与して胃内容排泄時間、小腸通過時間および大腸到達時間を求め、糖尿病性神経障害を有する症例において遅延を認めた。ともに個々の症例における再現性や食事内容の違いにおける通過時間の違いなどが問題となるが、消化管通過の評価には非侵襲的であり、有用な検査法と思われる。

以上、本セッションは機能の評価に関する興味深い発表ばかりであり、今後の研究の発展を期待したい。

(平木祥夫)